

---

## Tales of the abyss another

魔蘿姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Tales of the abyss another

### 【Nコード】

N5548C

### 【作者名】

魔蘿姫

### 【あらすじ】

一人の女性が未来の可能性を切り開いていく深淵の物語です。

## プロローグ（前書き）

文才がほしいです

## プロローグ

セリエ、敵……討てなかったよ……

自分の放った秘奥義

『シャイニングバインド』を飲み込む、

ユグドラシルの秘奥義

『デイベインジャツジメント』

を見ながら、アシュニアは死んだ親友の形見のクルシスの輝石を握る。

次の瞬間、アシュニアは光のうねりに飲み込まれた。

復讐って虚しいだけだね。

アシュニアは消え去る中、そう思った。  
クルシスの輝石が輝いた事に気づかず。

【ねえ、アル。私があるに何か出来るかしら？】

【近くにいて笑ってくれていたらそれだけで嬉しいわ】

【ありがとう、アル】

【こちらこそよ、エルフの私を受け入れてくれて……ありがとう……  
セリエ】

二人は笑顔で抱き締めあった。

【セリエ！セリエ！しっかりして……みんなは？みんなはどうしたの！？】

【アル？ごめんね】

【どうして謝るの！？】

【私、神子にはなれなかった。怖くて、不安で……発作も辛くて……】

【あなたはただでさえ病弱なんだから】

【神子は世界を救わないといけないの】

【知ってるわ！だからまず治療を……】

【無理よ。もう体は限界みたい……】

【諦めないで！駄目よ！あなたは生きないといけないのよ！】

【これを…これを彼らは奪いに来る…だからあなたに……託す…わ…】

【これは…クルシスの輝石？】

【そう、彼…らはそれを『ハイエクスファイア』…と言っていた…わ】

【『ハイエクスファイア』】

【逃げ…て、ア…ル】

【セリエ！………どうして！？なぜ、あなたは神子に選ばれなければならなかったの！】

【それを渡してもらおう】

【！ 貴方は誰！？】

【クルシスの天使、その持ち主だ】

【天使であろうと、これは渡せないわ！】

【ならば、力づくで奪わせていただくこう】

【くっ！『レイジングミスト』】

【チツ、逃がしたか】

【セリエ、敵を討つよ】

【遂に見つけたわ！ユグドラシル！】

【貴様、例の出来損ないの神子のハイエクスフィアを持つエルフだな。私はエルフがよく思っていない。不愉快だ。消えろ！】

冒頭に戻る。

セリエ、私わかったよ

復讐は何も生まないって

もう遅いけれど私、もう憎しみに支配されない。

天国で会おうね

《駄目よ!》

エクスファイアが輝いた。

“天を過ぎよ”

“時をつむげ”



“ 地を走れ ”

“ 世界を貫け ”

“ 時空の扉 ”

暖かな光がアシュニアをつつんだ。

**F i r s t      違う世界（前書き）**

書きたいこといっぱいあるのに書けません。文才、ないな

サワサワ……

「ん？」

穏やかな川下でアシュニアは目を覚ました。

「え？え？え？」

自分は死んだはずだと混乱したが、人の気配に昔からの癖でフー  
ドを被ってしまった。

顔を出したのは中年の小太りの男だった。

「あれ、あんたこんなとこで何やってんだい？」

「あ、あ、あの……」

人間とふれあうのは何年ぶりだろうか？  
と考えながらも今の状態を把握するため質問することにした。

「ここは、どこでしょう？」

見たこともない花にアシュニアは触りながら聞くと、男は驚いた顔  
をして、アシュニアに言う。

「あんた、旅人さんかい？女の人一人で危ないよ。ここはエンゲープの外れだよ」

「エンゲープ？」

全く知らない。

少なくともテセアラにはない。

まさか、シルヴァラントだろうか、と考えたアシュニアは地図を見せてほしいと男に頼み、地図を開いて、固まった

その地図にはテセアラともシルヴァラントとも書かれていなかった。

大きく『オールドランド』と書かれていた。

悟った、違う世界に来てしまった。と

異世界に行くことはそれほど難しくない。しかし、転移するためには莫大なマナが必要となる。そのため、世界を守るために封印されたのだ。

異世界にきたアシュニアであつたが

【よかつたのかもしれませんがね】

と思つた。

憎しまなくて済む、醜い心をさらけださなくてもよいのだ。

知らない間に涙がこぼれた。

男はアシュニアの涙に驚くと何を勘違いしたのか、エンゲープにアシュニアを連れていくと他の民家より一際大きな家の戸を叩いた。

「なんだい？」

中から声がしてすぐ中から人の良さそうな、女性が出てくる。

男は女性に何かしらを告げ立ち去った。

「まあ、まあ、女で一人旅だつて？こんなご時世に大変だね。さ、さ、入った。入った」

「失礼します」

女性の名前はローズさん。エンゲープを取り仕切っているらしい。凄いい。

案内されたのは寝室。

「もうすぐ日が暮れるからここで休みなよ」

「でも」

「疲れてるんだからゆっくり眠りなさい」

確かに疲れているからローズさんの気遣いに預かることにした。

「ありがとうございます」

人間にお礼を言ったことなど、セリエ以来だった。

みんなが眠った深夜

アシユニアはベットを整え、ローズの家を出た。  
出る時に

「ありがとう」と言い置いて

「落ち着いて住める場所を探さないといけませんね。個人的には森が良いのですが……ありました」

森を見つけるとアシユニアは歩きだした。

**S e c o n d      チーゲルの森（前書き）**

オリジナルまっしぐらー      頑張ろう



## Second チーゲルの森

近くの森に入り、探索したが故郷に似ていて懐かしく感じる。

（エルフは産まれながらに森で住む生き物なのですね）

ふと、故郷が頭をよぎったアシュニアは近くに落ちていた手頃な木を魔法を使い横笛へ加工した。

探索で見つけた大木に登り横笛に口をつける。

（笛を吹くなんて何百年ぶりだろう）

アシュニアは一息し、息を吹き込むと高らかに美しい音色が森へこだました。

クルシスの輝石を持つアシュニアは当然自分の周りの雰囲気の変化に気づいたが吹きつけ、エルフの民謡の一曲を吹き終えると周りに呼び掛けた。

暗く静まった夜の景色の中にキラリと光る眼光がいくつも現れたが、どれも殺意はなく歓迎するかのように優しくに光っている。

「下手だったかしら？」

（我等の心を癒すには十分の心地好さだ）

驚いた。狼と話せている。

正確にはクルシスの輝石のテレパシーだ。

「嬉しい」

穏やかに微笑むと狼たちは（もう一度聞かせてほしい）と申し出たのでまた笛を吹いた。

今度は森の全てに届くほど響きわたる。

いつの間にか森の全ての生き物が集まった。しかし、そこに食物連鎖は陰も形もなく、アシュニアの笛の音色に森の木々さえも酔いしれ続けた。

翌日、森に小さな家が建った。アシュニアの家だ。

建てたのはウッドゴーレム、チーグル。

ウルフたちは木の実などを持ってきた。

普通では有り得ないことだが自然と共に生き、自然に愛される種族、エルフだからこそ受け入れられたのかもしれない。アシュニアだからとも言える。

その森の名は

チーグルの森

✓

# Third ローレライ教団（前書き）

捏造しすぎです

### Third ローレイ教団

「これと……これと、これ」

只今セントビナーで本を購入中。

お金は笛を吹いて、人からお捻をもらったのでそれを使っている。

主にこの世界に來た時から感じていたマナとは違う力の流れ。

それについての本。

元より勉強好きで努力家で才能もあるアシュニアはエルフ族の中でも色濃くエルフの力を受け継いでいるため、軟禁されていた時期があった。

その時にやることがなかったアシュニアは本の虫になるのに時間がかからなかった。

買った本は『フォニム』について書かれた本、初級から上級までだ。

会計を済ませ、店を出るとフードを被ったままのアシュニアに子どもたちは群がり

「さっきの笛、聞かせて〜！」や

「遊ぼうよ！」と口々に喋る。

子供の好きなアシュニアは快く、近くのベンチに座り笛を取り出すと優しく笛を吹く。エルフ族の民謡

『精霊と大樹』

遙か昔の物語を基に作られたらしいが内容は不明、でも楽しげな曲であることに変わりはない。

吹き終わると子供たちだけでなく周りにいた全ての人が拍手を贈った。

アシュニアが恥ずかしそうに頬を染めたのはフードに隠れて見られなかった。

セントビナーを出て、エンゲープへ向かう。森の生き物たちへのご飯を買うためだ。

アシュニアが来てからはチーグルの森の魔物は人を襲わなくなり、魔物同士の捕食もなくなっている。

夜はアシュニアが笛を吹き、ご飯もアシュニアが用意する。

アシュニアが来て二ヶ月、そんな生活をアシュニアは続けていた。

虹色の天使の羽。ハイエクスフィアをつけることによって、形成されるものだ。

それを使い、エンゲープの近くまで飛んでいく、勿論見付からないように。

エンゲープの買い物済ませたアシュニアは羽で森に帰っていくと森の入口に見慣れない集団を発見した。

大柄で立派な髭を持つ男と緑色の髪の少年、ピンク色の髪の少女に深紅の髪の少年である。少女の横には、大型のライガが寄り添っていた。

「このような森に何か用でもあるのかしら？」

とアシュニアは呟くと森で一番大きな木に降りた。



アシュニアの家はチーグルの森の奥の方に建っている。魔物たちの溜まり場だ。アシュニアが帰ってくると嬉しそうに魔物たちはアシュニアにくつつき顔を舐める。

「くすぐつたいわ」

そう笑顔で返したがアシュニアと魔物たちの顔をこわばらせると南を向く。

気配が近付いてくる。人だ。

きつと、入口にいた人間だ。

アシュニアは魔物たちを見るとアシュニアが気配を感じている方向へ向き、敵意を剥き出しにしている。

こんな森に来るからには、相当のてだれに違いない。特にあの男、

一人雰囲気違った。要注意だ。と心で呟くと魔物に

「私の家にいてください。彼らと戦ってはいけません」と言い、他の魔物たちにも伝えるに走り出した。

導師 side

おかしい

アツシュが感じたのは不可解な静けさ。

ヴァンが近付いてくると、アツシュにのみ聞こえる声で

「気付いたか？アツシュ」と言うとアツシュは頷く。

「森に入って一度として、魔物にあっていない」

「気配は感じたが直ぐに離れていった。どういうことだ」

「……考えても仕方がない。チーグルの巣へ急ぐことにしよう」

ヴァンは導師イオンに森の異変を伝え、急ぐことにした。

アリエッタのライガの背中にイオンは乗るとヴァンたちはチーグルの巣へ急いだ。

「ついたな、どうぞ、導師」

「長かったですよ」

「…テメエはライガに乗ってただろ…」

イオンのものに言い、アッシュが不満を漏らすとイオンは恐ろしいほどの笑顔でアッシュに向き口を開いた。

「アッシュ、貴方の有給休暇は今年は無いです」

「な！？………」

アッシュが驚愕した隙にイオンはアリエッタとチーグルの巣に入っていた。

ヴァンは優しくアッシュの肩をポンと叩くとイオンたちと同じく巢に入っていく。

アッシュは肩を震わせた後、大声で

「くそ！」と叫んだ。

「久しいな、ユリアの縁者よ」

「お久しぶりです。どうです？何か問題でも」

イオンはチーグルの長老に聞くが長老は首を横に振る。

「アシュニアが来てからは穏やかな日々ですな」

「アシュニア？」

「この森に住む女性ですじゃ」

ヴァンはいぶかしむ。

「この森に……ですか？」

「彼女は我等を慰める。まるで彼女自信が自然の様じゃ」

「アシュニアと言われたか、その女性は何者なのです？」

真剣に聞いたヴァンに長老はあっけらかんと答えた。

「しらぬな」

「は？……何も知らずに信用していらつしゃると？」

ポカンとしたヴァンに長老は

「勘じゃ」と答える。

するとヴァンは

「会ってみたいですね」と笑った。

チーグルの巣を出た一行はアシュニアと言う女性の話をしていた。

「アシュニア…でしたか？彼女、不思議な方です」

「変な奴だろ」

「でも、分らないです…けど大丈夫な気がする…です」

「会って見たかったが…仕方がなからう」

導師一行は入り口に辿りつく、結局一体たりとも出てくることはなかった。

「おようなら」

導師一行は振り返るとフードを被った推測するに『アシュニア』  
が少し離れた場所に立っていた。

面食らっていたイオンは我にかえると近付こうと一歩だした瞬間、

数千頭に及ぶほどの、魔物がアシュニアの前に守るかの様に現れた。

「さようなら」

アシュニアが再度行った言葉にイオンは

「ヴァン。行きましょう」

「しかし、導師!？」

「彼女の優しさに甘えましょう」

そう言うと

「また来ます」と言い、外へ出ていく。

アッシュ、アリエッタ、ヴァンも後を追って行った。

アシュニア side

姿を見せなくなかったけれど、長老の頼みならと思い姿を見せたが  
やっぱり後悔した。

「また来ます」

少し嬉しかったですよ。

アシュニアは魔物たちに  
笛を吹いた。

、

## Fourth エルフ族の歴史（前書き）

まだまだ原作には遠いです。捏造続きます。  
！

ごめんなさい



## Fourth エルフ族の歴史

“ 遙か昔、創西暦のザオにおいて ”

“ 大いなる力を持ちたる種族、在り ”

“ 予言を詠めぬ唯一の種 ”

“ 異端の存在、世界は赦さず ”

“ 日が三度上りし時 ”

“ ザオの地、砂漠へ変わりたり ”

“ 自然に愛さる其の種族 ”

“ 自然は嘆き悲しみて ”

“ 黒き哀しみ、吐き出した ”

“ 種族の名、イスパニアにて ”

“ 自然に愛さる者 ”

“ エクセリアⅡルミネⅡフェイスフォンに冠さるるは ”

“ エルフ ”

頬に感じた冷たいものを拭うと涙だった。

これを見つけたのは偶然だった。

セントビナーの古い本屋の奥の棚、普通なら気づかない古ぼけた場所。

譜術の禁書と共にその歴史書がおかれていた。  
惹かれるようにその本を開いた。

そして、知った。

悲しい事実、この世界のエルフはもういない。

少し孤独感にさいなまれたが恨みはしなかった。

エルフは強い種族だ。

傲慢で高潔、自尊心が強くエルフ族を世界で一番の種族だと思っている。

人族とエルフ族は相入れない存在なのかもしれないとさえ思う。セリエはそんなことないと、怒るかもしれないが

これで益々エルフであることを知られる訳にはいかなかった。  
悩みが増える一方のアシュニアであった。

結局、その歴史書と譜術の禁書を購入した。  
禁書は役にたちそうだ。

アシユニアは帰ると直ぐに音素を感じる練習を始めた。  
本によれば七種類、闇、地、風、水、火、光、そしてユリア<sup>スコー</sup>ージュが発見したこの世界を支配する予言の元、第七音素である。第七音素は未だ全て解明されていない特異な音素だ。これは才能がないと使えないらしいが……

「できた」

こんなに、あっさりできていいのだろうか。

『ヒール』が発動。

マナを繰る感覚と似ているのでコツが掴みやすかった。  
こう考えるとマナは万能だったのだと感じてしまう。

音素を繰り、詠唱をする。禁書を広げ、出来るだけ力を弱める。コントロールも大切だ。

“断罪の剣、七光の輝きを持ちて降り注げ”

『プリズムソード』

目の前が輝くと半径十メートルが吹き飛んだ。  
手加減したのに。

一人で練習していて良かったと思う。

結局、日が暮れるまで練習を続けた。

エルフである自分の体をめぐる莫大なマナを使えば、以前の世界の術を発動できる。こういうのを役得だと思う。

すでに音素は手足のように扱えるようになったアシュニアだがその特異性に全く気付いていなかった。

そして……

クルシスの輝石が大きな変化を迎えようとしていた。

**F i f t h    六神将との出会い（前書き）**

何でもありありになってますね。  
ありがとなのね

読んでくれて

## Fifth 六神将との出会い

ヴァンと披験者イオンが

チーグルの森へ行った、それから一年後

「実は行ってもらいたい所があるのだ」

信託の盾騎士団<sup>オラクル</sup>、幹部会議室に六神将を集め、ヴァンは六神将に提案すると緑髪の鳥の様な仮面を被った少年が不満丸出しで

「何処に？」と聞くとヴァンが

「チーグルの森だ」と言うとアッシュが眉間に皺を寄せる。

「アシュニアか？」

とヴァンに聞く。話についていけない緑髪の少年

シンクがワケわかんないと言う風に手を掲げる。

勿論、熊のような大男ラルゴも、金髪の凛々しい顔立ちのリグレットも怪訝な顔をしている。

「アシュニアって誰？」

「チーグルの森に住んでいる女性だ。以前、イオン様と訪れた時に一目だけ見た」

イオンと聞いた時にシンクの表情が固くなったが気にすることなく、話を続ける。

「フードを被った不思議な女性だ。そのアシュニア殿を連行してきてほしい。手段は問わん。多少手荒くともよい」

「じゃあ、さっさと行くよ。僕だって暇じゃないんだ」

一人さっさと出ていったシンクにヴァンは苦笑するとリグレットとラルゴが一度礼をした後、続いてアリエッタも礼をして出ていく。結局、無視され続けた白髪のデイストはかなきり声を上げ出ていった。

残ったのはアッシュとヴァン。

「六神将総出か、あの変な奴を高く評価してるみたいじゃねえか」

ヴァンは少し微笑み、そうだな。と言い真剣な顔で。

「正体の知れない者には、最大の注意をしなければならない」



三日後

アシュニア宅

アシュニアは笛を吹きながら、舞う。  
その舞に合わせて音素も舞う。風の音素がアシュニアの周りを回り続ける。

魔物たちもそれに合わせて踊る。  
幸せな時間だ。

そんな時間も長くは続かないことをアシュニアは薄々気付いていた。

突然の森の訪問者によって現実となる。

魔物の彷徨が森へ木霊した。  
「これは！」

侵入者への警告。

以前の様に魔物たちは隠れるように指示を出し、様子を見に侵入者の元に走る。

見たことがある顔が二人、知らない顔が三人、緑の少年は前に見た少年に似ていたが体から感じるものが違った。不安定、と言つべきものかもしれない。

どうやら、私が目的の様ですね。しかも、穏やかでもない。

「仕方がないですね」

そう呟くと彼らの前に出ていった。

「おでした」

と、アッシュがアシュニアに向くと全員がアシュニアへ向く。

「出てくるならさっさと出てきてよね」

「すみません」

「謝られるとこっちが困るんだけど」

「すみません」

「また謝った」

「すみま

「ええい！話が進まねえ」

繰り返し続けている二人にイラついていたアッシュが遂にキレるとアシュニアに指を指す。

「俺たちとダアトへ来い」

「嫌です」

即答されてアッシュは面食らったが顔をしかめると剣を構えた。

「…まあいい、力ずくで連れていく…ただだ！」

アッシュがアシュニアに突っ込んでくると他の五人も武器を構えた。

アシュニアはクルシスの輝石の力をフルに使いアッシュの剣先を見極め、確実に避ける。

「アッシュの剣術がかすりもしないとは」

ラルゴがそう呟くと自分もアシュニアに突っ込んでいく。アシュニアの背後を取ると鎌を一閃、空気を震わせたがアシュニアは軽く跳躍し避ける。

アッシュの剣先を見極めたアシュニアはアッシュに掌底を叩き付ける。うめき声を上げ、アッシュは近くの木まで吹き飛ぶ。

それと同時にラルゴの鎌を蹴り上げ、その勢いのまま回し蹴りをラルゴの腹に叩き込む。ラルゴの巨体が数メートル吹き飛んだ。

リグレットとアリエッタが詠唱を始め、シンクがアシュニアにラッシュをかける。高速で連打される拳と脚のコンビネーションだが、アシュニアは完全にみきっていた。

流れるように避けるアシュニアにシンクは舌打ちしたがアシュニアの下に譜陣が現れた瞬間、勝ち誇った顔をする。

「あんたの負けさ！」

避けられるわけのないアシュニアは手を前に出し

《音素に呼び掛けた》

「音素よ。我に従いたまえ」

アリエッタの『ブラッディハウリング』と

リグレットの『ホーリーランス』が発動した瞬間、音素の流れが変わった。

ターゲットはアシュニアではなく、アリエッタとリグレットへと変化した。

「馬鹿な！」

「キャッ！」

リグレットとアリエッタが驚愕し、自ら放った譜術に攻撃され、気絶した。

残りはアリエッタのブラッディハウリングに巻き込まれたディスト（戦力外）を除くとシンク一人になった。

「あんた、いったい何者な分け？」

シンクが冗談めかして言うの特攻してきた。

が

アシュニアの秘奥義

『セイグリットシャイン』の光に意識を失った。

アシュニアは溜め息を着くと魔物たちに自分の家に運んでくれるように頼んだ。

（食べていい？）

と聞かれたが

「駄目よ」と言い返し、六神将はアシユニアの家を訪問することになった。

## S i x t h ある家族?の一日(前書き)

遅くなりました。しかも少ないです。ごめんなさい

## S i x t h    ある家族?の一日

シンクが目を覚まし、最初に目に入っただのはリグレットと家の中でもフードを被っているアシュニアが親しげにコーヒーと思われる飲み物を飲みながら雑談している姿だった。

アッシュもその隣でコーヒーを煤り、アリエッタとディストは未だに寝ている様だ。

とりあえず起きて口を開く

「……………何やってんの?」

「お茶会ですよ」

アシュニアがにこやかに答えと、新しいコーヒーを机に置いた。シンクは置かれた席に着きアシュニアに探るような視線を送る。

「……………なんで助けたのさ」

「へ…………?」

「だから、なんで敵の僕たちを助けたのさ!」

「理由なんてありません……………ただ人が死ぬのを見たくなかったからです」



アシュニアのケロッとした様子にシンクは頭を抱える。

理解できないよ、まったく

「ここはあんたの家？」

「はい」

木造の一人で住むには大きい気がする家。

「あんた一人で住んでるの？」

「はい、大体はですが。森の生き物たちも来てくれますから寂しくはないです」

六神将はアリエッタがいることで魔物と人が仲良くなることに抵抗がない。

リグレットはコーヒーを飲み終わるとシンクに向く。

「アシュニアには一日だけダアトに来て貰えることになった」

呼び捨て……もう仲良くなってるよ。とシンクは心で呟くとアシュニアに

「最初は無理だっと思ってたけど良いの？」と聞くと、

「魔物たちの長に森を頼んできました」と微笑んで返す。

「出発は明日にする。良いな？シンク」

「別に構わないよ。ところでラルゴは？」

シンクは頷いたあとに周囲を見て、リグレットに聞く。

「外で薪を割っている」

「嫌に古風だね」

アシュニアは苦笑いを溢した。

火も暮れた頃、アシュニアはホワイトシチューを作った。

リグレットとアリエッタとラルゴはアシュニアを誉めたが、アツシユは無言でシンクは

「まあまあんじゃない」と憎まれ口を叩き、デイストに至っては何故か、カレーにまつわる悪友の話 시작했다。六神将は聞き飽きるのかまるで無視し、アシュニアだけが楽しそうにデイストの話を聞いている。デイストもアシュニアが気に入ったのか、ずっと話し込んでいた。

デイストの話が終わるとアシュニアは少し大きめの包帯と筆を取りだし、包帯に何かの文字を記していく。

アツシユとアリエッタはそれが気になったのか、アツシユはアシュニアに聞く。

「なんだそれは？」

「ああ、これは護身用で呪い<sup>まじな</sup>を込めているんですよ」

「呪い？」

「想いをその物に宿すんです。簡単に言うतすれば、御守りの様なものです」

本当は違うんですけどね。とアシュニアは心の中で呟いた。

「そうか」とアツシュは言うたアツシュはベットへ入った。アリエツタはまだ、アシュニアの作業を凝視している。

仕方なく、アシュニアはまた作業を始める。作業を終えたとアリエツタはこっくりこっくりしていたのでアシュニアはアリエツタをベットへ運び寝かせた。

アシュニアは最後の作業をしに外に出る。

出てすぐの地面に複雑な譜陣を片手に描いていく。

完成したのは、明け方ごろであつた。

## Seventh 傍観者と改変者

準備の整った六神将とアシュニアはアシュニアが徹夜で仕上げた転移譜陣の前に立っている。

転移譜陣は超振動を応用したもので（一般の人間では制御、及び書くことさえ不能）複雑怪奇な紋様となっているのはダートへの情報転移そして肉体転移をスムーズ（情報、肉体転移が遅くなると解離を起こすおそれがある）に行うための措置だ。

あまりの技術力にディストは狂喜乱舞しアシュニアを熱烈に勧誘したがリグレットにいつの間にテンションをあげていたのかオーバーリミットし、『プリズムバレット』でディストを黙らせた。

「これに乗ればすぐにダートに着きますが良いですか？」

ディストは早く試したいのか、ウズウズしていること以外は問題なく、みな頷いた。

全員が譜陣に乗るとアシュニアは詠唱を始める。

「『

』座標認識完了。 移転座標確定。

移転開始」

その言葉に譜陣が反応し、輝きを持つそして…アシュニアたちと共に消えた。

「言っていなかったことがあります。移転座標は、ダート……上空です。だから皆さん、落ちますよ」

「ハア?! 着地方法は?」

「自力でお願いします」

結局、アリエッタの魔物たちに助けられた一団は住民の奇異の目を避けるようにローレイ教団オラクル騎士団本部へと入っていく。

「先に言っというてよね」

「すみません。シンクさん」

嫌味を丁寧に戻されてしまったシンクはばつが悪そうにそっぽを向く。ラルゴとリグレットはその様子に苦笑し、アッシュは鼻で笑う。シンクは、しゃくに触ったのかアッシュに喧嘩をうっていたが一団はそれを気にすることなく進むのだった。

修練場に通されたアッシュニアは指導していた男、ヴァンに礼をする。

「初めまして」

「初めまして、私はヴァン・グランツです。この度は強引な形でお呼び立てして申し訳ありません」

「気にしていませんよ。ダートは初めてなのでいい体験をさせていただきました」

「それは安心しました。……指導はこれまで！これより自身で鍛練するように！」

ヴァンは修練場の兵たちにそう叫ぶと

「此方です」とアッシュニアを先導した。

ヴァンの自室に入り、椅子に座る。ヴァンは机を隔て反対側に座ると真剣な顔になる。

アシュニアもその姿を見てすぐに真剣な顔になる。

「アシュニア殿は予言をどう思います？」

アシュニアは少し困惑したがありのまま答えた。

「興味がない」と

この世界に来て、予言に触れたが自分の予言は読めないが故に気にしていなかった。

この世界でそれは異常だとも人々の生活を見て分かっていた。予言に固執しているとも。

だがそう聞いたヴァンはこの他嬉しそうだ。ヴァンはさらにこう切り出した。

「この世界は予言に固執し過ぎていると私は思っているのですよ」

ローレイ教団上層部の人間の発言とは思えなかった。いや、もはやこの世界では禁句である。それをヴァンは易々と言ってのけたのだ。

意味がわからない。

「私はこの世界を予言から解放したいと思っていますのです」

ヴァンの言葉で私は悟った。私に協力してほしいと言っているのだ。予言に固執した世界。未来が、運命に潰される世界。私も助けたい。しかし

エルフは他の世界の運命を変えてはいけない。なぜなら時空に歪みが生まれるからだ。時として、それは世界を崩壊させる。故に未来を変えることは未来に通常なら縛られない人間のみ関与できる。魔物や自然は運命に忠実。だから世界を変革できない。その摂理、故に亜人であるエルフ、自分はこの話にのることは出来ないのだ。私は傍観者。少しだけ悔しい。」

「ごめんなさいヴァン。私は手伝えない」  
アシュニアがそういうと悲しげに聞く。

「なぜです？」

「私は貴方の邪魔はしない。協力もできない。ごめんなさいヴァン。私は傍観者にしかねないの」

なぜか、など答えられるはずがない。

本当は助けたいの。でも、私にはその資格がない。

「この事は誰にも言わないわ」

「そうですか、残念です。リグレットも落胆するでしょう」



「本当にすみませんヴァン」

アシュニアが頭を下げるとヴァンはいえ、いいんですよ。と言い、席を立つ。アシュニアもならって席を立つ。

すると外に出ようとしたヴァンは振り向き、

「ここへはいつでもお越しく下さい。リグレットやアリエッタが喜ぶでしょう」

「はい。喜んで」

アシュニアが笑いかけるとヴァンも微笑み返し、出ていく。アシュニアもすぐに出ていった。

アシュニアは月に一度、六神将に会いに行くことが常となった。彼等との絆は深まる。

楽しい時間は過ぎるのが早い。そういわれる。物語の中、アシュニアはただ傍観者として行く末を見続けた。

唇の端を何もできない悔しさで噛みながら、彼等の一生を心に刻む。

そして、物語は終末へと行き着いた。途中、赤毛の少年ルークと栗色の髪の少女ティア、導師イオン、守護役アニス、赤目の軍人でデイストの親友ジェイド。彼らはヴァンたちと違った世界革命を起こそうとしていた。

世界は混迷を深め、そして彼らは消えて逝った。

、

**Epilogue 終焉と運命と（前書き）**

第一章 完です

## Eight 終焉と運命と

多分、こんな時間も私を置いて過ぎ去っていくのだろう。

だから

私は

人間と関わるべきではないと

この気持ちを隠していた

でも

今は

貴方たちの温もりが

貴方たちとの関わりが

愛しくてたまらない

それが

長く永久とわに

続かないとしても

私は

貴方たちを

この身が

決して

決して

忘れない



くちようとも

さようなら

愛しい人達よ

ただただ、アシュニアはエルドランドから昇る一条の閃光を見ながら涙を流す。

「さようなら……私の愛しい友人たち……」

彼女の鋭い感覚はかれらの死を認知した。

リグレット、アッシュ、シンク、ヴァン。

「私の愛しい友人たちは…死んでいく。これは罰なのね」

エルフと人は相入れぬ存在じゃ

エルフの長老の言葉。

ああ、罪深き私にかれらを救うすべを……

祈り続けた。

こんな結末を誰が望むのでしょうか。

誰が喜ぶのでしょうか。

アシュニアは遂に考えてしまった。

過去を変えたい。

勿論、禁囲である。

時空を越えるならともかく、時間を超越することは一つの未来を潰

すこととなる。成功するとは限らない上、自分の身に何が起こるか  
わからない。

いや、確実にエラーが発生するだろう。

アシュニアは分かりながらもこの現実へ反旗を翻すことを決めた。

巨大な譜陣と魔法陣を重ね、時空の旋律をつむぐ。それと同時に身体中から生気が抜けていき、まるで老婆のように肌がしわしわになっていく。そんなことを気にすることなく詠唱を続けるアシュニアの胸にあるクルシスの輝石はアシュニアの不穏を感じとったように微かに光る。

詠唱が完成した瞬間、ローレライ解放の光に負けないほどの一条の光が空へと伸びる。

「未来は定められたものじゃない。今はそう思えるわ……ヴァン」

アシュニアは光に飲まれ消え去った。

## **E i g h t h    終焉と運命と（後書き）**

第二章から過去編です。ケテルブルクからですね。

## N i n e t h    ゲルダ・ネビリム

ある小さな村に一人の女の赤ん坊が産まれた。

不思議なことに、その赤ん坊の手には紅く綺麗な紋様が描かれた石が握られていたという。

そして、その赤ん坊はゲルダと名付けられた。

### 第二章    業の見返り

雪がちらほらと降る中、港からケテルブルクへと一人の女性が歩いていた。

その人こそ、ゲルダ・ネビリムである。

彼女はケテルブルクで先生をすることになっている。

元々彼女は勉強が好きで意図せずこの職に着いた訳だがこの職業は大好きだった。

子どもが好きだったのだ。今も新しい生徒たちへ思いをさせていた。

ケテルブルクへ着き、今まで使われていなかった小さな廃校に入る。そして、自分の職場を綺麗にしようと掃除を始めた。

少しして窓の外から視線を感じ、そちらを向くと銀髪の少年がゲルダを見ていた。

目が合うと少年は恥ずかしそうに逃げていく。初初しい少年の態度にゲルダは微笑み、また掃除を始める。

掃除が終わったのは昼過ぎであった。

暇になったゲルダはケテルブルクを観光しに出かけることに決め、マフラーとコートを着ると外へ出ていく。

光が反射し、キラキラと雪が煌めく幻想的な光景にゲルダは見いつていると遠くから子供たちの声が聞こえてきた。

自然と声ができる方へ歩いていくと先程の銀髪の少年と金髪の少年と少女が楽しそうに遊んでいる。不意に金髪の少年がゲルダに気付くと近寄ってくる。

「あんたが新しくきた先生か？」

ゲルダは10歳程の年齢相応の言葉遣いでそう聞いた爽やかな金髪少年に不快感は持たなかった。

「初めまして、ゲルダ・ネビリムよ。音素学を教えることになってるわ」

「俺はピオニー。でも教えること少ないと思うぜ。なんてったって俺たちには辞書人間がついてるからな！」

ピオニーは胸をはってゲルダに誇る。ゲルダは、いぶかしげに先程の言葉を反芻する。

「辞書人間？」

「ジェ…ジェイドの事だよ」

ゲルダの呟きに答えたのは驚いたことに、銀髪の少年だった。

「ジェイド？」

何故だろう。彼らとジェイドと言う人を知っている気がする。

「天才譜術師、ジェイド・バルフォア。この町では有名なんだ。大人でも簡単には使えない譜術を軽々と使う才気、莫大な知識に容姿端麗、将来有望な少年って大人は期待してるが…どうかな」

ピオニーは嘲笑するように笑うと、悲しげに目を細めた。何故か様になっている。ゲルダはそんな大人びた少年に問いかける。

「どうして？」

「兄は死を理解できません」

金髪の少女はピオニー同様悲しげに話す。なぜ彼らはこんなに大人びているのだろう。例外の年齢相応の会話をする銀髪の少年がより幼く見える。

「あなたのお兄さんの？」

「はい。……兄は化け物です」「ネフリーー！そんな風に言うなよ」



ピオニーはネフリーと言うのだろう少女に声を荒げる。

「本当のことよ。先生、確かに兄は天才です！でも命をなんとも思っていないんです」

「ネフリーさん……」

「だから、先生！お願いです！兄に…兄に命の大切を教えてほしいんです！私、兄が怖い…」

ピオニーは泣き出してしまったネフリーを連れて家に帰っていった。銀髪の少年はゲルダの隣に立つとすがる様な目で見える。

「僕たち、ジェイドのこと怖いけど好きなんだ。物知りだし、時々優しいから」

ゲルダはこの少年のきこちないがはつきりとした思いやりを感じた。優しい子だ。

「あなたの名前は？」

「サフィール」

「ねえ、サフィール。なぜネフリーさんは初対面の私に相談したの？」

ゲルダがそう言ってサフィールに向くとサフィールはもじもじと話した。

「えつとね…あのね…ネビリム先生と初めてあった様な気がなくて。なんて言うのかな…懐かしかったの。みんなそう言ってた。初めてあったのにね？」

ゲルダは驚いたが確かに懐かしさを感じていた自分に気付いた。

「私もよ。それに嬉しい。私もあなたたちの期待に応えないといけないわね」

そのジェイドと言う少年に会ってみよう。

ゲルダはサフィールにジェイドが何処にいるのか聞き、そこへ向かった。

町外れ、人があまり来ない森の中に不自然な雪の溶けた痕を見つけた。ジェイドと言う少年が使った譜術の痕に違いない。

サフィールの話によれば、ジェイドはよくここへ来ては譜術の練習相手に魔物を狩っていると言うことだった。勿論、無害な魔物も。痕跡が新しいことから近くを散策すると、ピオニーとは違う金髪の少年がウルフと向き合い詠唱をしていた。

ウルフは直ぐ様、突進するが少年に届く前に詠唱が完成する。

『フレイムバースト』

少年がその言葉をつむいだ瞬間、ウルフは炎の小爆発に吞まれ、フオニムに帰った。

少年は構えを解くとこちらを向く。

「誰です？」

こちらを向いた少年の顔には一片の感情もなく無表情だけがあった。整った顔立ちをしている。きっとこの子が、ジェイドに違いないと

考えたゲルダは姿を現す。

「私はゲルダ・ネビリム。ケテルブルクへ新しくやって来た先生よ」

「僕はジェイド・バルフォア。どうしてこんな所へ？」

普通なら誰も来ることのない様な場所にゲルダがいることが不審なのだろう。

ゲルダはサフィールに聞いてここまで来たことを話した。

ジェイドは一度、溜め息をつく。

「全く……」

溜め息をする姿を微笑ましく見ていたゲルダはジェイドの右手の怪我を見つけ『ヒール』をかけて治した。

するとジェイドはゲルダを驚愕し顔で見る。

「貴方は第七音素譜術師なんですか？！」  
セブンスフォニマー

「え？ええ、そうよ」

ジェイドの驚きようにゲルダの方が驚いてしまう。

ジェイドはゲルダを熱心に観察する。第七音素譜術師は元々の素用がなければなれない。必然的にその数はごく少数となる。実際のケテルブルクにも巡回詠師か医師しかいない。極めて希少なのだ。ゲルダにしてみれば非常に居心地が悪い。

雪原が吹雪いてくるのをみて、ゲルダはジェイドにケテルブルクへ帰るように急かすのだった。

この出会いは必然なの、それとも二度目の偶然なのか。

、

## Tenth Show me my way (前書き)

評価してくだされば、幸いです。ではどうぞ

Tenth Show me my way

世界は流れるまま

同じ過去を刻む

成れど、また違う世界

きつとある幸

私は踏み出す

そして、歓喜する

おかえり、アシュニア……と

真っ赤だ

それは血のように

深紅に揺らめく炎

ぼやける視線でそう思う

体を揺するサフィールも、声をかけ続けるジェイドもぼやける

そのまま気を失った

遠くから声が聞こえる

ア……ニア

誰？

…シュニア

聞いたことがある声  
でも、わからない

ぼやけていた声はつきりしてくる

思い出せ、自らの願い。果たすべき使命

ね……がい 私の願い

血にまみれた少女、大男、女性、少年三人、そして、ヴァン……

え？ヴァン？誰？

自らの友すら忘れたか、その胸に光る友すら

友、セリエ

頭痛と共に蘇る思い出、一コマ一コマのフラッシュバック



わ…たしは、わた…しは

そう名は

アシュニアだ

思考が平けた

私はゲルダであつて、そしてアシュニアだ

私と私が<sup>ゲルダ</sup>同調する。そして、人としてのアシュニアが生まれた

忘れていてごめん、セリエ

エクスフィアが輝いた

《久しぶり》とでも、いうように

私はアシュニアだ！

意識が浮き上がる

土の中から這い出す。

そうだ。私は死んだことになっているのだ。

手を握ったり開いたりを繰り返す。感触がある。肌に火傷はない。エクスフィアの治癒だろう。

でも良かったと思う。  
火葬じゃなく土葬で。

ケテルブルクの外れの墓地を出る。

私が死んで二週間がたっているらしい。

別にそこは気にしていない。問題なのは身寄りがないことだけだ。少し悩んでいたアシュニアは閃いた。

一つだけ身寄りがなくても行けるところがあった。

ダアトだ。

教団に入れば、と考えたが一つ問題がある。

素顔を見せられない。

何故なら一度、ダアトの学校に勤めたことがあったからだ。

だったら、素顔を隠そう。

と思った瞬間。

カラン

目の前に仮面が落ちてきた。紫の紋様が浮かぶ顔全てを隠す面。

ローレライの配慮のようで、第七音素を感じる。

更に男を演じることにした。念には念だ。

仮面を被り、髪を結ぶ。転移譜陣を描く。

少しの風が心地いい。

と思った途端に左腕に激痛が走る。

左腕を見ると蒼黒い裂傷がはしっている。

なんだこれは！

自分の指で触ると裂傷の間には柔らかな感触がある。いや、腕はそのままだけでその部分の色が抜けているだけなのだ。

頭痛が起こる。ローレライの通信特有の痛さだ。

それは代価だ

意味がよくわからないアシュニアが聞き返す。

「なんの代価なの？」

未来を創り、未来を廃する代価。汝の願いの代価だ

「だったらこれは」

治らん。寧ろ、汝を蝕む

「そうですか、罪なんですね」

疵を擦る。感覚は有る。ただそれだけ。

それでもいい。

ダアトで世界の様子を見よう。だったら、それなりの地位に  
つく必要がある。

左腕はどうしよう。

その疵は安定を求め音素を喰らう。しかし、安定することは無  
いが故に喰らい続ける。そして、その喰らった音素は腕に蓄積され  
る。一歩間違うと暴発する

「なら、どうすれば……」

放出すればいい。汝ならできる

転移譜陣の音素を少し喰らった様で疵が紫に光っている。

放出…

手を森に向け、手に力を込める。疵が脈打つ。左腕が熱い。

紫の光が解き放たれる。

紫の閃光が視界を焼く。一瞬。

その一瞬で森の一部が消え去っていた。

左腕を私が見た後、空を仰ぐ。

「封印しよう。とんでもなさ過ぎるよ、ローレライ」

なれば、これを渡そう。そしてこれも

アシュニアの左腕が巨大な鎧で覆われ、右腕に包帯が巻き付く。

あの時の包帯だ。

それにこの鎧、着けるだけで左腕が落ち着くのが分かる。

アシュニアが安堵していると、譜陣が完成した。

では、また会おう

さあ、飛び立とう。

新たな世界を創るために

、

# Eleventh the battle (前書き)

あるキャラに似てきた

## Eleventh the battle

ダアトを歩きながら周りを見回す、街並みはそんな変わらない。

服装は男を意識した。言葉遣いは変え、男声を真似る。口調も右に同じ。

教会に入ると奇異の視線が向けられる。

そんなことには目もくれず、受付に話しかける。

「ローレライ教団に入団したいのだが」

受付の女性は左腕と顔を見るが、お待ちくださいと言い、大きな扉に入っていく。

少しして女性が兵士を連れた男を連れてきた。位は高いようだ。

男は俺に（今後男性口調）笑顔を向ける。

「入団したいのだから？」

「そうだ」

「軍事学校は」



「行っていない」

兵士が馬鹿にした顔をした。女だと知ったら更に馬鹿にされるだろう。だが此処で退くわけにはいかない。

「残念ですが素人は必要とするほど、人材に困っていないのでね」  
少し笑いを堪えた男が背を向け去っていく。俺は賭けに出た。

「俺は君よりも強い」

やや挑発するように。

男が反応するより周りの兵士が反応した。

「お前、この人が誰か知らないのか？この人はな

「待て」えっ？」

男は振り返ると楽しそうな目を向け、アシュニアに問う。

「そこまで言うお前の実力がみたい。来い、こっちだ」

俺は進んでいく男の後をついていく。

この先は記憶が正しければ、修練場だ。

賭けに勝ったと口元を緩ませた。

男が兵士たちを退けさせる。

お陰で周りには兵士の物見たちでギューギューだ。

男は剣を抜く。素早く振るところらに向ける。

「戦場の厳しさを教えてあげよう」

「なら俺が弱肉強食を教えてあげよう」

「ざれごとを」

エクスフィアを持ち、ヴァンを知っている俺には男の斬撃など止ま  
って見えた。

男が走り出そうとした瞬間

男が吹き飛んだ

周りには男が勝手に吹き飛んだようにしか見えなかったらしく、男に  
「ふざけてないでやっちゃってくださいよ団長」と言っていたが団  
長の顔は驚きに満ちていた。

どうやって

そんな言葉が伝わってくる。

久しぶりで、なまっていな心配だったが問題ないようだ。

男がまた走り出そうとした。すると男の腕から剣が飛ぶ。

カラン

剣が落ちると共に修練場に静寂が降りる。

男に強烈な力への畏怖が沸き起ると同時に

「参った……」

と声が漏れていた。

男の言葉を聞くと周りがざわめき始める。

歓迎とは行かないらしい。

俺は座り込んだ男に手を差し出す。

「お前は何者だ？」

立ち上がった男は俺に問いつめる。

名を決めてなかったことに気が付いた。

アルと言うあだ名からとってつけることにした。

「アルカだ」

こうして、俺のダートでの生活が始まった。

、

**T w e l v e t h    栄光を掴む者（前書き）**

まだ本編につきません

## Twelfth 栄光を掴む者

ローレライ教団に無事入団出来たわけなのだが……

ほとんどの時間を図書館で過ごしていた。

まだ新米なのだから、しょうがないが。

どうにも俺は周りから畏怖の対象と見られているようだ。

先日のあの男は師団長だったようで立場上危うく、どうにも俺はローレライ教団信託の盾騎士団の中に宙吊りの状態だ。

模擬戦を申し込んで来る者もいる。

本当に大変だ。

そんな中で幼い日のヴァンに出会えたことは運がいいのか、悪いのか。

教団の裏手にある庭で剣を振るい続けている少年を見つけた。  
入団二週間、その少年を見たのは初めてだった。

少年の剣術はまずまずだが、才気溢れる剣舞だった。

俺は更に近付いて声をかける。

「こんな所で特訓かい？」

「！……貴公は誰だ」

ヴァンは突然現れた俺に動揺を隠せない。

「アルカだ。君の名は？」

白々しいと我ながら思うが接点が多いほうがいい。

アルカと言う名前にヴァンは反応した。

「アルカ殿は確か師団長を入団当初倒したとか……」

「相手の実力を出させる前に倒しただけさ」

ヴァンは感心した面持ちで見る。

「私はヴァンといいます」

「アルバート流かい？」

「なぜ、アルバート流を！？」

「ホドに伝わるシグメント流に対と成す、大古からの剣術……そう聞いているが？」

「左様です」

警戒心を剥き出しにしたヴァンは俺を睨む。アルバート流もシグムン流も門外不出の流派なのだから警戒するのも当たり前だ。

アルカはそれでもヴァンに語りかける。

「強くなりたいか」

その言葉にヴァンは反応する。強さを求めるそついう年頃なのだ。

「強く……ですか」

「何かを守るとき、何かを貫くとき、何かを求めるとき、力は必ず必要となる」

「守る……力」

「君に守りたいものがあるならば強くなれ」

ヴァンはなぜかこの不思議な存在に信頼を持った。

「私は従者の家の生まれでローレイ教団に入団してはいますが、本家の主をお守りするのが使命であり名誉です。特にこの頃マルクトとキムラスカの間で小競り合いが頻発しています。父はまだ私に従者は早いと、このローレイ教団に入団させました。しかし私は悔しくてならない。主は幼馴染みであり、友です。今の私では父の足でまといです」

うつむく少年の肩に手を置く。

「君には資格がある。強くなる資格が」



「私は強くなれるでしょうか」

「なれるさ」

さあ、世界を進めよう

それからはヴァンの指南に力を注いだ。

なぜか人数が増えていったがまあいいだろう。

、

**T h i r t e e n t h    未来知る男（前書き）**

もう少しで本編に入りそう

Thirteenth 未来知る男

《なあ、聞いたか？》

《何を？》

《特務師団のアルカ師団長、正式に総長に任命されるらしいんだ》

《そうなのか！？やっぱりな。アルカ様なら当然かもな》

《でもスビード出世だよな。何年だ？》

《入団七ヶ月で師団長、その三年後に総長ってわけだ。凄いよな》

《アルカ師団長に反感を持ってた奴らはどうなったんだ？》

《あゝあのアルカ様に喧嘩売ってた奴らか。それがさ、面白いんだぜ！あいつら喧嘩売った後、アルカ様に反感持たなくなってたし、むしろ指導を受けに行ってた。アルカ様、やっぱスゲーよ！》

《てかさ、アルカ師団長ってよく孤児とか連れてくるよな》

《ほっとけないらしいぜ？あの人、見掛けによらず優しいしさ》

《俺、気になってたんだけどさ。アルカ様の左肩から手まで覆ってる装飾品って何かあんのかな？》

《俺もそれ思った。あの人が怪我するとも思えないし、最初からだよな、あれ》

《ああ、そうだ。両腕に包帯巻いてる位だったかな。あと仮面》

《アルカ様の顔知ってるのって導師様位しかないらしいぜ、見てえ〜!》

《本当不思議な人だよなアルカ様って》

《なあ、アルカ師団長のあとがまっけて誰だ?》

《ヴァンじゃねえか。若いけど特務師団でアルカ様の指南を受けてて強いらしいし》

アルカことアシュニアが教団に入って三年七ヶ月遂に総長にまで登り詰めていた。

が仮面を着け続けることが不可能となっていた。男装してまで続けていたが

「潮時だな」

板に着いた男言葉で呟く。

指導途中の兵士たちも気にかかるが頃合いとしてはいいかもしれな  
い。

拾った子供たちの世話は孤児院にまかせることにしよう。会うと決意が鈍るかもしれないから。

アシユニアは導師とヴァンに置き手紙を書きく。

それを自分の私室の机の上に置くと移転譜術を発動し、飛び立った。

次の日、苦笑いを浮かべる導師エベノスと大慌ての教団員たちがいたとか。

アシユニアが岩場に足をかけ、ある町を見下ろす。

「もつすぐだな……」

そうもつすぐなのだ。

崩落の序曲 プロローグ

男言葉もノリノリだ

、

**F o u r t e e n t h    世界崩壊の交響曲（前書き）**

評価してくだされば幸いです

## Fourteenth 世界崩壊の交響曲

ホドの崩落

まるでその先駆けとも言える真っ赤な炎が街を包んでいた。

特にガルディオス家は最たるものだった。

キムラス力軍の軍隊がなだれ込み殺戮の限りを尽す。

愚かだ。人は愚かで浅ましい。

俺はガルディオス家の中に入り込む、目的は達せられたのだろうか  
ムラス力軍はあまり残っていなかった。

心で謝りつつ兵士たちを鎮圧していく。  
一段落すると一つの異様な部屋を見つけた。人が積み重なった一つの山。

使用人と、きっとガイラルディアの姉マリーベルの姿があった。

息絶えた使用人たちを退かし二人を並べる。

二人とはガイラルディアとマリーベルである。

ガイラルディアは無傷だが案の定、マリーベルは重傷で虫の息だった。

マリイベルを助けるべきか。それとも……



「柄に合わないな」

『リザレクション』を発動し、傷を癒すが安静にせざるおえない。パールに預けるには、荷が勝ち過ぎてるな。

俺はマリイベルごと空間を圧縮するという荒業を使うことにした。これしか方法はない。

アルカが手をかざすと球体状に蒼い光が拡がり、一瞬で小さくなる。

そのビー玉大の玉になった蒼い玉をポケットに納め、パールの到着を待った。

数分後、パールが部屋に飛込んできた。

「ガイラルディア様！」

パールはアルカの存在に気づくと剣を向けた。

「ガイラルディア様から離れる！」

「良いとも」

あっさり退くとパールは何か企んでいるのではとも言つような疑惑の目でこちらを見る。

「貴様はキムラスカ軍ではないのか？」

「違うよ、パールギユント」

突然、本名を当てられたパールは俺を睨む。

「貴様は何者だ？」

「俺はアルカ。それだけさ」

俺はヒヨウヒヨウと言うと外に指を向ける。

「ここから北に少し行くと海岸に舟がある。使うといい」  
それだけ伝えると出ていった。

少し歩いた先の丘で近くの大陸へと転移する。  
数時間後、凄まじい轟音と共にホドは崩落した。

「これがルークが行使していた【第二超振動】なんて莫大で鮮やかな力なんだ」

俺は感心する他なかった。

これこそヴァンの憎しみのプロローグなのだ

、

**Fifteenth 憎悪（前書き）**

きついかもです

## F i f t e e n t h 憎悪

リグレットことジゼル・オスローに出会ったのは全くの偶然であった。

私がある小さな村に滞在していた時、ジゼル・オスローという少女に出会った。

十歳になったジゼル・オスローは武器屋に門前払いを受けた。  
なぜこうなったのかと言うと九歳になった弟が神託の騎士団に入団  
したいと言い出したことが発端だった。

弟は剣術に優れていたことから受かるだろうとのことだったがジゼル自身も同じ道に歩きたいと思っていた。

しかし、ここで問題が起きた。元来女性としての筋力しかないジゼル

ルには剣術は不向きであった。しかも、他の戦闘方法を教えられる人が残念ながいなかった。

そこで武器だけでも見たかったのだから、子供は入店できず追い出されたのだ。

ジゼルが途方に暮れていた時に左腕が異質な男に出会ったのである。

悲しそうに黄昏ている少女に声をかけたのは孤児を拾っていた頃の名残だ。

が声をかけて見るとリグレットにそっくりの少女だった。

その少女の話を聞くと新たな戦術指南を求めているとのことだった。

リグレット、この歳から悩むものじゃないぞ。

「俺で良ければ教えられるがどうだい？」

と聞いてみると嬉しそうに微笑んだ。

子供頃のリグレットは普通に感情を出しているようだ。

「本当ですか！？」

「ああ、君に合った戦術を教えるよ。だが、準備があるから、明日からだ。明日もここでいいかい？」

「はい！」

走り出したりグレットもとい、ジゼルはうきうきした気分で帰路に着いた。

後日、ジゼルは動きやすい格好で俺の所を訪れた。

俺は準備していた譜銃を手渡した。

「これは？」

「譜銃と呼ばれる譜業でね音素を打ち出せるものさ」

ジゼルは熱心に譜銃を見る。

俺はジゼルに射撃訓練を始めた。譜術訓練はしていたようで筋がよかった。

射撃の方もやはり才がある。

教えながら着実に強くなるジゼルを俺は楽しく見ていた。

そしてジゼル自身もアルカを尊敬していった。

この指導はジゼルが神託の盾に入団するまで続いた。

そして、入団と同時にジゼルとの交信を絶った。

俺はその後、ナタリアの母を保護した。（むしろ監禁）

発狂していたシルヴィアをマリイベルと同様に時間凍結させた。

Three - years - after

神託の盾の扉が開かれる。ただでさえ人の余り来ないそこへアル力が帰ってきた。

カツンカツンと響く足音が教団内を反響する。

そして、その異質な男を教団員たち全員が見る。

そんな中、アル力をしる教団員が呟く。

「《戦慄》のアルカ様だ」

男の形容し難いプレッシャーに圧され自然と道が開いていく。

そして、ある一室でアルカは目当ての人物に出会った。  
相手は驚き絶句している。

「やあ、ヴァン」

「ア、アルカ殿」

ヴァンはあの若々しさとは無縁となっていた。  
威厳を出すための髭だろう。

結局、ヴァンの私室にお邪魔になった。

ヴァンはアルカに微笑む。

「いや、お懐かしい」

「そうだな。あの頃はまだヴァンも若く真っ直ぐな眼をしていた」

「今の私があるのもアルカ殿のお陰ですな」

俺はソファアーに座らずに立ったまま言う。

「ヴァン、お前は強くなったな」

「……ええ」

「そして、お前は変わった」



ヴァンに俺は背を向ける。ヴァンはよく分からないという風に分からないでいる。

「お前の眼に途方の無い憎悪が見える」

「……………」

「ホド崩落からお前は変わった。予言を…………世界を憎み始めた」

ヴァンの声が固くなった。

「…………何をおっしゃりたいのです」

「なあ、ヴァン。この世界はあまりに予言に縛られていると思わないか？」

「はい」

「俺はこの世界を予言から解放したい」

普通の人なら馬鹿馬鹿しいと切り捨てていただろうが、アルカには奇妙な説得力があった。

「そろそろ出ていくよ、ヴァン」

「アルカ殿」

「なんだい」

「私にとって予言は憎むべき敵です」

「そうか」

そう呟いて俺は転移した。

ダアトの慰霊碑にて

ジゼルはただ優しく、マルセルと刻まれた慰霊碑に触れる。  
悔しさに涙がこみ上げる。最愛の弟が死んだ。いや、予言に殺され  
た。

弟を殺した予言が憎くて憎くて堪らない。

弟を見捨てたヴァンが憎い。

そんなジゼルに近づく人物がいた。

「弟が死んだ……か」

「アルカさん」

ジゼルの隣にアルカは立つと慰霊碑に花をそえる。

「……復讐か？」

「!!」

「俺はお前に復讐の為に譜銃を指南したわけじゃない」

まだ涙に濡れた顎に手を添えてこっちを向かせる。

「お前の今の瞳を俺は好きじゃない」

「……！私の気持ちなんて、アル力さんにわかるものか！」

走りさるジゼルを見送った後、慰霊碑に語り書けた。

「助けられなくてごめんなさい」

私の心の仮面がこの時、壊れていた。

Sixteenth ティアとカンタビレ（前書き）

短いです

## S i x t e e n t h    ティアとカンタビレ

誘拐事件にアルカは静観の構えだった。

おとなしくあるべきと思うアシュニアの考えとサフィールに会いたいと思うゲルダの考えがぶつかり合い、結局静観することにしたのだ。

それから永くして、アルカはシンクたちイオンレプリカを助けた。シンクだけはヴァンの目がつく所に火傷を治し、寝させた。

問題なく、世界は回っている。

この間に六神将が結成され、その中にアッシュ、シンクが着任していた。師団の中で唯一カンタビレはヴァンに否定的だった。

カンタビレの師団に入団したティアとカンタビレに一悶着あったが和解したようだ。

そしてカンタビレは大詠師モースとの不和で地方へ、とばされることとなった。

「ヴァンの妹、ティア君だったかな？……彼女をモースの直属に推薦したそうだね」

「……知っていたか、この事は未だ公表もされていないぞ。ましてやローレライ教団を退団したお前ならティアの事はおろか、移転先さえ知りえないはずだ」

カンタビレは訪問者、アルカを睨む。

「顔が広くてね」

「フツ、今更だな。お前の知りようは」

呆れて笑ったカンタビレにアルカも笑顔で返す。仮面で見えないが。

「ティアもヴァンに疑問を持っている風でな。あの男の邪魔さえ出れば安いものだ」

「君とヴァンの不和も噂通りのようだね」

「どうにも奴とは合わん！」

「左遷されてもかい？」

カンタビレはさも当たり前とも言つようにアルカに言う。

「地位に興味はない。自分の道を貫くだけだ」

「……そうか。なら、なににも言わない。何処かでまた遇おうカント  
ビレ」

カントビレは何も言わず、去っていくアル力を見送った。

次の目的地はロニール雪山。

そこで六神将と接触を図る。

## Seventeenth Blizzard

リグレットは寒さにコートをより深く着ると物思いにふける。

リグレットたちは、ロニール雪山のセフィロトを守っているダアト式封咒の確認と調査に来ていた。

世界でも有数の危険地帯ロニール雪山。ここの魔物たちは別格だとアリエッタが言っていた。なんでも数年前から魔物たちが突如凶暴化したらしい。この仕事は元々、この近辺の地理に詳しいディストと参謀のシンクに私だけが行くことになっていた。

しかし、本来仕事柄特別な事がなければ集結しない六神将がその調査の期間、空きができた。それによって閣下は調査隊に六神将全員を任命した。閣下もロニール雪山を危険視していたからだろう。

こうして今、雪山を上っているのだ。



「たくさんの足音がする…です！」

アリエッタが突然叫んだ。アリエッタには魔物並の優れた嗅覚と視覚と聴覚があるため、とても状況に敏感だ。アリエッタの叫びと共に兵士ならびに六神将全員が武器を構える。まるで雪山は彼らを嘲笑うかのように吹雪始める。

「何処から来るか分からない！円状に陣型を組め！」

参謀長のシンクは兵士たちに指示を出す。視界を埋め尽す白のカイテン。

そして、微かに何かの足音が聞こえてくる。

それは着々と音は近付いてくる。アリエッタとディストだけは脅えたようにカイザー……よく分からないが譜業機械の裏に隠れている。アリエッタは震えが止まらない。

まさに数メートルと言うところで突然、足音が止む。兵士たちが困惑を露にした瞬間、リグレット、アッシュ、ラルゴ、シンクが兵士に叫んだ。

「上だ！」

しかし、叫ぶのが数秒遅かった。

空から降った巨大な魔物に数人の兵士が踏み潰された。

「グウオウウウー!!」

雄叫びを挙げる巨大な人と鹿を交ぜたような茶色の魔物。リグレットたちも見たことのない魔物だった。

まるでケンタウロスのような魔物は兵士たちを軽々と殴り飛ばす。アツシュとラルゴが挑みかかるがあまり強いダメージを与えられない。「糞! 全く効きやがらねえ!」

「はあああああ! …… くっ、表皮が硬すぎる」

ラルゴは炎を纏った鎌を振り魔物の足を切り裂く。しかし数十センチ程しか切り裂くことができない。

「これほどの魔物がいたとは誤算だった」

リグレットがシアリング・ソロウを放つが毛が少しだけ焼けるだけでいまいちだ。

シンクが退却を促そうとした後方から兵士の叫び声があがり振り向くと今しがた苦戦していた魔物と色が違い角が光輝いている魔物があった。逃げようとした兵士たちは魔物の手から放たれた光に絶命していく。

アリエツタが脅えた理由がよくわかる。格が違う。

数分の後、調査隊は壊滅状態に陥っていた。魔物の攻撃に耐えきれなくなったアツシュは巨大な腕の強烈な一撃を受け、端まで吹き飛ばす。ラルゴはアツシュが飛ばされた事に一瞬気が向き、シンクと共に白い魔物から不意の一撃をくらい岩に激突する。

デリストとアリエッタは白い魔物の放った光線を受け、地面に叩き付けられる。

残るはリグレット彼女一人となった。

白い魔物が手から放った光によって右手は使い物にならない。

絶体絶命のリグレットに近付いてくる白い魔物。

白い魔物の口には光が集まり周りを照らしていく。

（駄目か……！！）

もう上がらない腕を、かばうように肘を支える。

白い閃光が魔物から放たれた。

はずだった。だが白い閃光が放たれる前に、紫の線が白い魔物の顔に巻き付くと行き場を失った閃光が白い魔物の頭と共に誘爆した。

自分達を苦しめた魔物のあつけない死様にリグレット以下六神将は呆然とする。

雪を踏む音が近づきリグレットの隣で止まる。

「圧倒的なまでの強さを前にして尚、お前は諦めなかった。お前は強くなつたな、リグレット。精神的にも肉体的にも」

「アルカさん!!」

リグレットは歓喜に満ちた声で数年ぶりに会う人物の名前を呼ぶ。アリエッタもアルカに気付くと走って近寄り脚に抱きつく。不安からか嗚咽を漏らすアリエッタの頭を優しくアルカが撫でると泣き出してしまった。

リグレットも何故こんなにアリエッタが信頼をアルカに寄せているのか、わからない様子でアルカを見る。仮面を被っているため判別しにくい但我が子を見るような眼でみている様に感じた。ますますわからない。

「グウオウウウ!!」

そんな空気を吹き飛ばすように激昂する茶色の魔物。

「つがいだったようだな」

アルカがそう呟く。

アリエッタは怒る魔物に脅える様にアルカの背中に隠れる。

魔物は鼻息荒く突進してきた。

リグレットは左腕の譜銃を構えたがアルカがそれを制する。

「リグレット、俺がやろう」

リグレットを制した右腕が光り出す。右腕と言つより包帯が、であるが。

「『万刺突流』」

真つ正面から魔物を受け止めるように、紫に染まる怒涛の刺突の濁流が起こり、一瞬で消え失せた。

アッシュ、ラルゴ、シンクは呆然とアルカをみる。アリエッタはアルカを嬉しそうに、リグレットは更なる尊敬の眼差しでみる。

デイストは気絶中。

問題ない、寧ろ都合がいい。

少しすると包帯は跡形もなく、消え去っていた。マナが尽きたのだろう。

役目を終えたアルカは再度アリエッタの頭を撫で、体から引き剥がし兵士たちに『リザレクシオン』をかけ、皆に背を向け去ろうとする。と、アッシュが怒鳴る。

「おい！貴様、アルカと言ったな？！」

「確かに俺はアルカだが？」

「《戦慄》のアルカだな？」

「その《戦慄》は俺が付けたもので無ければ名乗った覚えもない。

しかし、君がそう思うならそうなのだろう」

「……そういうものなのか……？」

「君の《鮮血》同様、つけられて嬉しくもない。二つ名なんて損なものさ」

俺は転移し、キムラスカのシェリダンへ向かった。

、

## Eighteenth 準備時間

シェリダンの古ぼけた鍛冶屋にアルカは明らかに規格外の量のガルドをカウンターに積む。

葉巻をくわえたオヤジが  
「まいど！」と金を数え、数え終わるとニツコリと笑い、白い布の包みをアルカに渡した。

アルカは包みから中の御所望の物を取り出し確認する。

全体的に青があしらわれ縁を彩るように金が輝き、フォルムは長剣と大型の銃が合成されたような容姿となっていた。

何度が振り、確認する。

「確かに受け取った。ありがとう」

「大事に使ってくれよ。力作なんだからな！」

店を出る。名も無きオヤジにアルカは手を小さく振った。

## リグレット side

あのロニール雪山以来アルカさんに会うことはなく一年が過ぎた。  
あの時は謝る暇もなく立ち去ってしまうアルカさんを止めることが  
できなかった。

計画が着々と進行していく中、閣下はアルカさんの弟子であったこ  
とを知った。それでふとシンクは漏らした事柄がある。

彼は何者なのだろう？

疑問に思ったことも無かった。

突如現れた譜銃の師匠。

隣にいと安心し、尊敬し敬愛する存在。

その筈だと言うのに……

彼の言葉が私の心に響く。



今のお前の眼は好きじゃない

見透かされていた。心から燃え上がる憎悪の業火。  
確実に彼は気付いていた。復讐という甘美な自己満足の虚しさを。

訪ねたい。貴方は世界に何を求めているのですか。

アルカさん

S i d e o u t

時はすでに

世界混沌の始まりを

告げた

Next

第三章 遭遇する英雄たち

## Nineteenth 再会する英雄たち

切り揃えられた庭の草花。見事なほど綺麗に並べられた白い煉瓦。その中心でルークは譜業人形に剣を奮う。

この時こそルークにとって嗜好の時間である。その為か口元に笑みが浮かぶ。

師匠がいるためか、より嬉しそうだ。

「……よし、復習は以上だ！ルークよくやったな！」

「はい！ヴァン師匠！」

自分を誉めるヴァンに嬉しそうに微笑むルークを見学している親友ガイの姿もある。

「本当にヴァンがいる時のルークは嬉しそうだな」

「左様ですね」

庭の草花を切り揃えているパールがガイに笑いかける。ガイも面白いと言う風に笑う。

そんな平穏を崩す聖女の歌。

ルークとティアがぶつかり合い天への光柱を生み出す。第七音素が干渉し合いあらゆる距離を無へと還す。

眩い光が止むと二人の姿が消えていた。  
ヴァンたちはほおけることしかできなかった

ルークは不満を隠すことなく……と言うより全面に押し出し、前をズカズカと歩く。

長い長い坂道を疲れたルークは飽々したと言う風にティアに不満を漏らす。

「なあ、いつまで歩きやいいんだよ!？」

「結構な長さを降りてきたはずだからもうすぐ抜けるはずよ」

ティアとルークは暫くすると一人の男を見つけた。近くに馬車にあるところを見ると客車の様だ。

ルークが話しかけようと走り出したが何故か男が先に手を振り近付いてくる。

「こっちだよ!お客さん!」

「やったぜ!ついてる!」

ルークは無邪気に喜んでいるというのにティアは非常に警戒している。

（なぜ、私たちが来るのを知っているように話しかけてくるの）

そんなティアの警戒に気づかない男はルークたちに笑いかける。

「お二人が遅いもんで時間間違っただかと思いましたよ！」

さらにティアは警戒する。

「なぜ私たちがここにしていると知っていたの？」

「あれ？ルークさんとティアさんですよ？」

「そうよ」

「そうだよ！て言うかお前さっきからなんなんだよ！」

ルークがティアにくっついてかかるがティアはティアで思案し、もう一度男に訪ねる。

「誰かに聞いたのですか？」

「ああ、あんたらの連れのアルカさんだよ」

「アルカ……どこかで聞いた覚えがあるようない……」

「なにやってんだよ！早く乗るぞ！」

「待ってルーク！無用心に」

ティアの注意は誰に聞かれることもなく、空に消えた。

ただで乗せてもらったルークたちは途中、戦艦に警告を貰いはしたが特に問題無くエンゲーブに着いた。

男はルークたちを下ろすと去っていった。

エンゲーブに着くと、ルークの不機嫌顔も和らぎ、子どもが新しい玩具を与えられたように楽しそうに覗いて回る。

ティアも飽きれ半分、可愛さ半分にルークを見る。ルークが食料屋の前で立ち止まり林檎を手にとった時、ティアの頭に突然激痛が走った。更に映像が頭を何度も投影される。

ルークが林檎を食べる。

そんな馬鹿なことが……

カリッ

ルークが林檎をかじった。

「噓、何故？」

どういうこと？私はこうなると知っていた？それにこの心のわだかまり。私は……何かを忘れている。

「ハア？なんで俺が金払わねえと行けねえんだよ！」

ティアは現実に戻るとルークの元に行こうと足を速めた瞬間、ルークの隣に不可解な人物が現れた。

「すまない私の仲間だね。世間に疎いんだ。許してやってくれないか？」

食料屋の男は驚いたようにその人物を見ると笑いかける。

「なんでえ、アルカさんの知り合いだったのかよ。ならいくつでも持っていてくれ」

「別に」

「ならもう一つ貰うよ」

ルークは不満そうに呟くがそれを遮りもう一つを手に取り、ティアの方へ歩いていく。ルークも慌ててついてくる。

アルカはティアに林檎を渡す。ティアは警戒しながら林檎とアルカを交互に見、かじった。林檎の豊潤な味が口の仲に広がる。

（美味しい……）

「お気に召したかい？」

「！？……え、ええ……」

図星を突かれたティアは赤面し、そっぽを向いてしまった。ルークはそれを不思議そうに見る。

「？」

アルカはついついティアの可愛らしい反応に頬を緩めたが他人には

仮面で見えない。

「あ、貴方は何なんですか!？」

照れ隠しに怒られたアルカは自己紹介することにした。

「俺はアルカ。初めまして、ティア、ルーク」

「何故、私の名前を!？」

「君のことは知っているよ。ティア・グランツ君」

ティアはナイフを構えたが全て、アルカの銃剣によって吹き飛んだ。

ルークは少し悲鳴をあげ、とばっちりで飛んで来たナイフを避ける。

「くっ!」

「な、何しやる!」

二人がアルカを睨んだがそこにいたはずのアルカの姿は無かった。取り残された二人は、騒ぎを起こした為ローズの家に呼ばれることとなった。

やや大きめの家に入るとローズと呼ばれる女性とマルクト特有の青い軍服に身を包んだ美しい男性がこちらに目を向けていた。

（私はここを、この人を知っている）

ティアはまた、妙な既視感に頭を抱えた。混乱する。



先ほどの騒ぎは特に咎められる事もなくティアとルークは帰してもらった。

ルークたちが家を出ると金髪の軍人もついて出てくる。  
そして、こう言った。

「貴方たちも二回目ですか？」

そう聞かれた瞬間、ティアは全てを思い出した。

「大佐……」

かつてティアがジェイドをそう呼んでいた呼び名を溢す。  
ジェイドも嬉しそうに

「はい」と返す。

ティアは次にルークへと視線を向け、嗚咽を漏らす。そして、抱きついた。その存在を確かめる様に。

「ルーク……ルーク……」

しかし、抱きつかれたルークはたまったものではない。  
ルークは赤面し、慌てふためく。

ジェイドは楽しそうに

「おやおや」と笑っただけであった。

## Twentyth 湾曲

赤髪の少年と栗色の髪の少女が歩き、その後ろを青い軍服を来た男が歩く。

三人が戦艦に入っていくのを確認したアルカは笑みを溢す。

少なくとも彼らは独自で良い未来へこれから導こうと画策するだろう。自分が大きく動く必要も無くな……………

「はあ、そうはいかないようだ」

アルカは戦艦を追い掛ける一体のライガを見て、溜め息をついた。

ルークは困惑を隠せずいた。突然連れてこられた戦艦の客室にいた緑髪の少年となんとも奇妙な人形を背負った少女に

「お久しぶりです」

「ひっさしぶり」 と挨拶されたからだ。

「誰だ、お前ら！」

ルークがそう怒鳴ると緑髪の少年は悲しそうに顔を歪める。少女は

ジェイドという軍人に質問をした。

「大佐、もしかしてルークっておぼっちゃまモードのまんまなんですか？」

「そのようですね。ですがアニス、そもそも私たちの方が特異なんですよ」

「あたしもまだ信じられませんが、でも、なんか違いますか？」  
アニスが考える素振りをする。とジェイドも思案する。

そう、前の現在と今の現在は変化していたのだ。  
アニスは借金を持たずスパイとして来てはいなかった。更にエンゲ  
ーブで食物窃盗事件も起きていなかった。

そして、気になることが一点。

アニスが前回は会わなかったアルカなる人物にあったと言う。

勿論、私も知らない。ただし前回は。

今回は色々な噂も聞いている。とても強く化け物じみているなど逸話も数多い。虚偽かも正当かも真偽は測りかねる。

ジェイドはそこで思案を止め、悲しそうに顔を歪めるイオンに慌てるルークに助け舟を出すべきか、傍観するべきか。考え始めた。

ティアが溜め息を漏らしたのを誰も気付かなかった。

「貴方たちもアルカと名のる人物に出会ったようですね」

「ええ、ですが、すぐにいなくなりました」  
「ますます分からない人物ですね」

「はい……」

ジェイドが艦橋にいくと今度はティアが思案する番だった。

ティアもアルカについてヴァンが話していたことを思い出した。  
その目には尊敬と信頼が窺い知れた。

思い出した。アルカは兄さんの師匠だった。  
何年も前にそう聞いた。

「でも……そうだとするとアルカは敵……」 「どうしました？ ティア」

青ざめたティアにイオンは心配そうに近付いてくる。

「い、いえ！ なんでも……」

ティアがイオンに返事をしようとした瞬間、艦が揺れた。凄まじい横揺れにティアたちも壁に寄りかかる。

「まさか、襲撃！」

「えー！？ あたし、ここにいないことモースに言って無いよ！？」

そう極秘の和平交渉であるため知られているわけがないのだ。

すぐさまジェイドから放送が入った。  
放送に従い、兵士たちが退艦していく。

ルークたちは艦橋へと走る。

前回とは違い、ラルゴの襲撃もなく甲板に出たルークたちは艦橋へと急ぐ。

艦橋を目前とした瞬間五人の目の前に鮮血色の髪を持った男が降ってきた。

アッシュだ。

「此処から先へは行かせねえ」

「……アッシュ」

相変わらず眉間に皺を寄せた顔でルークたちを睨む。正確にはルークを。

アッシュは剣を構えるとルークへ襲いかかった。当のルークは自分そっくりのアッシュを見て困惑しながらも剣を構え、アッシュの剣

を受け止める。

「ハア                    !!」

「くうっ!!」

二人がぶつかりあった瞬間、剣と剣の接触部が紫の淡い光を起こし、二人はその力に吹き飛ばされ甲板に転がる。

「ルーク!」

ティアがルークに近付き頭を起こす。ルークの目の焦点があつてくるとルークは笑顔成形どる。

「大丈夫だ。ティア」

ティアは久しぶりに見たルークの笑顔に嗚咽を漏らす。

「ルーク……ク……?」

「ただいま、ティア」

近くで見ていたイオンやアニスも歓喜の表情でルークに話しかける。

再会を喜んだ後、アッシュを起こす。

「ん?」

起きたアッシュは周囲を確認し、ルークたちに聞く。

「どういうことだ?」

アッシュも帰ってきた。

世界を湾曲させよう

未来を湾曲させよう

過去を湾曲させよう

現在<sup>いま</sup>を湾曲させよう

英雄に許されたものとは、なんだろう

、

T w e n t y f i r s t   ラゲナロク（前書き）

遅くなりました



T w e n t y f i r s t    ラゲナロク

アルカは視界に一頭の大きめのライガと桃色の髪の少女を入れると乗っていた足場から……………

飛び降りた

アリエッタ S i d e

アリエッタはイオン発見の報告が有り、リグレット達と共に襲撃をかけたわけだったが……

「誰も……いないです」

人より格段に秀でている鋭びな感覚を兼ね備えたアリエッタは艦内の状態に不安を抱いていた。

甲板から艦橋へと入ろうとしたアリエッタに本能が警告を鳴らした。

上！

アリエッタが身構えた刹那……………

アリエッタがよく知った人物がアリエッタの前に降ってきた。

その人物は淡い光を放つ虹色の翼を開き、着地した。アリエッタは見惚れ、その人物を凝視した。

その人物はアリエッタに微笑みかけた。

「久しぶりだな。アリエッタ」

アリエッタは満面の笑みを溢した。

アルカSide

アリエッタから話を聞いた限りでは前回と変化はそう無いようだ。あったとすればイオンの所在がばれていること（アニスの報告無しに）くらいだろう。

しかし、このくらいの変化は問題はない。

ルークたちが逆行したのはネックだったがその分、楽になるだろう。

未来を変える。その力が多い方がいい。

だが時間はない。

時間干涉による反動が左腕に現れ始めた。

左腕の拘束具は意味を成さなくなってきた。

このままいけば……

【ラグナロク】

時間崩壊が起こる。

この左腕によって。

全てを呑み込み、歪め、破壊する。

それだけは避けなくては。

俺はルークに全てを託さなくてはならない。  
新たな罪と共に

、

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5548c/>

---

Tales of the abyss another

2010年10月21日22時10分発行